The Tokyo Branch Letter No.57 RSCDS東京ブランチ
東京ブランチレター October 2002
A Newsletter of the Tokyo Branch of the Royal Scottish Country Dance Society
Editor: Tom Toriyama, 6-9-21, Ohzenji-nishi, Asao-ku, Kawasaki 215-0017 Tel/Fax 044-988-7773

東京支部 New Year Dance 2003

2003年1月5日（日）　午後1時—4時30分
北区赤羽会館大ホール
（JR赤羽駅東口下車5分・消防署の裏手）
¥1,200（RSCDS非会員¥1,400）
ピアノ：小海弘子
（難曲はウォークスルーします）

The Happy Meeting	29-9
The Braes of Breadalbane	21-7
Dancing in the Street	42-4
The Chequered Court	42-3
The Marquis of Lorne	Misc2
La Tempete	2-1
Hooper's Jig	Misc2
Anna Holden's Strathspey	42-2
The Deil Amang the Tailors	14-7
Mrs Stewart's Jig	35-1
The Gentleman	35-5
The College Hornpipe	20-12
Muirland Willie	21-9
Culla Bay	41-2
Mrs Stewart of Fasnacloich	Lflt-21
St Andrew's Fair	5/82
Miss Milligan's Strathspey	Lflt-19
The Reel of the Royal Scots	Lflt-27
Extra: The Montgomeries' Rant	10-1

新年早々のダンス会です。賀詞交歓もかねて大勢のかたがたのお越しをお待ちしております。受付、段取りなどでみなさんのご奉仕をつのっております。
担当：若松陽子

2003年東京支部合宿

2003年2月15日(土) 午後1時—16日(日) 午後3時
石川島研修センター
（神奈川県綾瀬市・小田急線相鉄線海老名駅下車）
¥14,000
講師：東京&他支部（交渉中）ティーチャー
ピアノ：　東京支部ミュージシャン
申し込み方法など詳しくは追ってご連絡します。
実施にあたりアシスタントをつのっており、あらためてお願いにあがります。
担当：佐藤裕治

東京支部クラス

ビギナーズ・クラス再スタート

9月まで長くビギナーズ・クラスをやってきて、4人の講師の持ちまわり指導により、参加者に相当の上達がみられました。

10月からまた新たな気持ちでビギナーズ・クラスをスタートします。いままで「踊り」というものをやったことがない人が、半年のこのクラスを卒業したら「スコティッシュ・カントリー・ダンシングって楽しい」と感じられるクラスにしたいと思っています。

もちろん、いままでのビギナーズ・クラスに参加された方の参加大歓迎ですし、「東京支部の催しだからのぞいてみるか」というスコティッシュ・ダンス経験者も大歓迎です。

2002年10月 –2003年3月・月2回（計12回）
（10月は7日（月）と28日（月）です）
毎月第2・第4月曜日　1:30–4:30
千代田区総合体育館5階・多目的室
1回　¥800
ウォーキングから5つの基礎ステップまで
Cast off, Reels of three から Knot まで
The Highland Fair から Miss Milligan's Strathspey まで
講師：中田多鶴子・トム鳥山

ステップ・ダンス・クラス

このクラスのテーマは「カントリー・ダンシングにも役立つ！ステップ・ダンス」です。

フォーメーションはわかるようになったが、きれいに踊れないと悩んでいる方にぜひお薦めします。ダンスの基本をマスターして、楽しく踊れる身体をつくっていきましょう。

10月から新しいダンスに取り組んでいます。はじめての方や、すこし休んでいた方はこの機会にぜひご参加ください。

10月12日(土)　午後1時15分—2時05分
神田　さくら館体育室
講師：櫻井香枝
11月以降毎月第2土曜日　1:15–2:05
の予定です。会場はそのつどお知らせします。

東京支部クラス（つづき）

インターミディエイト・クラス

10月12日(土)　午後2時15分—4時30分
神田　さくら館体育室
講師：大井冨佐子・加藤沙弥子
11月以降毎月第2土曜日　2:15－4:30
（会場はそのつどお知らせします）
担当講師：　11月　五十嵐成子
12月　小山かおる
1月　渡辺悦子
2月　掛川純子
3月　長峯真弓・若松陽子

アドバンスド・クラス

（11月2日(土)　午後6時30分—8時30分の予定）
日取りと場所は同封のチラシをご覧ください。
講師：林　浩子
12月以降毎月第1土曜日　6:30－8:30
（会場はそのつどお知らせします）
担当講師：　12月　近藤幸子
1月　クラスはありません
2月　西田淑子
3月　境　雅子

支部クラスの会場は、千代田区在住者ということで松橋順子さん・田村美恵子さん（東京支部OG）に毎月会場に出向き、確保していただいています。参加者も同区在住在勤者ということになっています。参加する方はどのようにしてクラスが続けられているか、十分ご承知いただきたいと思います。

確保決定が約1ヶ月前なのでそのつどのお知らせとなります。

会員の方で、クラスに適した会場確保が可能であれば、ぜひ運営委員にお知らせください。

2003オーストラリア
第28回 ウィンタースクール
2003年7月13日（日）—20日（日）
アデレード セント・マークス大学
A$685（約¥56,000）
講師　アレックス・ジャッピー、ジーン・ドッズほか（申込用紙はセクレタリまで）

Exams Tokyo 2003

2003年春に実施する予備試験、フル資格試験の概要がきまりました。

JEC2003（3支部合同委員会）メンバー：
東京支部　吉澤敦子（委員長）・境雅子
東海支部　小山芳樹・勝崎秀信
埼玉支部　佐藤雅紀・田村妙子
東京支部実行委員長：　トム鳥山
東京支部試験会計担当：　青木幸子

グループ	場所	トレーニング期間	実技試験
フル資格試験:			
F－1組	埼玉県	4/13－4/19	4/29－4/30
F－2組	埼玉県	4/20－4/26	4/27－4/28
予備資格試験:			
P－1組	千葉県	4/20－4/26	5/7－5/8
P－2組	岐阜県	4/27－5/3	5/9－5/10
東海支部（参考）			
フル試験組	検討中	4/26－5/2	5/3- 5/4
予備試験組	検討中	4/26－5/2	5/4－5/5

1．以上は基本日程で、会場の確保、チューター（トレーニング・ティーチャー）の都合などにより変更することがあります。
2．受験生は個々の事情により、東京支部会員であっても東海支部主催のトレーニングに参加することができます（その逆も）。ただしクラス定員の制約上、ご希望に沿えないことがあります。
3．参加費用は会場を確保しだいお知らせします。
4．**2002年11月に受験生名簿を確定します。**受験を希望される方はApplication Form（願書）を支部セクレタリにご請求、諸事項を英文でご記入のうえ、11月末までに支部セクレタリにお送りください。
5．チューターおよびエギザミナーのアテンド、通訳、書面答案の和文英訳、実技試験のスチューデント役、期間中の総務実行など、会員各位の大きなご協力なしにこのプロジェクトを進めることができません。資格取得者をはじめとする**会員各位の真剣なご協力をお願いいたします。**時期となりましたら、細部についてあらためてお願いする所存です。

東京支部拡大委員会

新執行部発足から約半年間の活動を振りかえり、これからの方向を討議する、いわば半期総会です。2月合宿のとき、1時間ほどをこれにあてる心積もりです。短時間ですが、活発な討論を期待しています。

誰にでも踊れる！　カントリー・ダンスにも役立つ！—ステップ・ダンス（櫻井香枝）

本紙1ページのステップ・ダンスについて、誰にでも踊れるし、カントリー・ダンスにも役立つということをもう少しお話させてください。

みなさんはカントリー・ダンスで悩んでいませんか？自分のイメージどおりのきれいなステップでやっていますか？　カウントどおりに自分が行くべき場所に到着していますか？

ダンスを美しく踊るには、それがどんなダンスであっても基本があります。まず身体の中心軸をつかむこと。つぎに足のポジション（手にもある）を覚えること、そしてムーブメント（ポジションからポジションへの移動で、ダンスの動きの小単位）を習得し、このムーブメントをつなげて行くことがステップになるのです。

カントリー・ダンスもステップ・ダンスも基本は同じです。skip change of step というムーブメントをたとえにとりましょう。このムーブメントをマスターすれば、大きな移動でも、reel of three の中で使っても、美しく踊れることになるわけです。

ところで、ステップ・ダンスは難しいというイメージがあります。それは、たくさんのムーブメントが出てきて、非常に複雑に見えるからです。けれども、複雑なムーブメントを分解して一つ一つ丁寧に積み重ねて行くと、不思議に踊れるようになるのです。そして、難しいことをやり遂げると、うれしさも何倍にもなります。

「あらっ、わたしでもできるかも」、「やりたーい！」と思ってくださったあなた、ぜひ次回のステップ・ダンス・クラスにお出かけください。そして、しばらく続けてみましょう。このクラスは基本に重点をおいて取り組んでいますので、未経験の方でも、体力に自信のない方でも大丈夫です。

私的なことで恐縮ですが、私の西武池袋コミュニティカレッジの生徒さんには、O脚を改善した人もいますし、すっきり体形になった人もいますよ！

続けることが上達のコツです。では、次回のクラスでお会いしましょう■

サイズを変えました—ブランチレター

(Tom Toriyama)

長らくB5サイズで親しまれてきた「ブランチレター」、このように変身しました。委員会において、①字が小さい②Exams の感想はともかく、6ページ以降の雑文は不要。「ブランチレター」は情報＋ダンス名の由来記事程度の内容で十分③Exams の感想も字数を制限すべきだった④「ブランチレター」はセクレタリ名義で発行すべきではないか⑤来年度会費値上げは必至なのに、大型化・ページ増による出費増は回避すべき、などの意見が続出しました。しかしながら、ひとまずこの内容で発行し、ご批判を仰いでさらにみなさんの共感を得られるものにして行きたいと考えます。

紙名についても、「東京ブランチレター」から、世界の支部と同じように特色をあらわす紙名に変えようと、委員会で検討しましたが、みなさんから広く新紙名をあげていただき、そのなかから決めたほうがよいという結論になりました。

「東京ブランチレター」の内容についての**ご批判**、および**新しい紙名**を、セクレタリあてぜひお寄せください。口頭でもかまいません。新紙名については2月合宿時の東京支部拡大委員会で決定したいと思っています。

わが支部の正式名称は「東京ブランチ」なのに、なんで「東京支部」を使うのか、というご不審があると思います。これは、「ブランチ」は4文字、「支部」は2文字という編集上の利点によるものです。オリンピックを「五輪」、ワールドカップを「W杯」と表記するのと同じです。

ともあれ、紙面内容、新紙名にかぎらず、支部活動についてもご意見、ご感想など遠慮なく支部委員におっしゃっていただきたいと存じます。東京支部はあなたの支部です。■

RSCDS東京支部

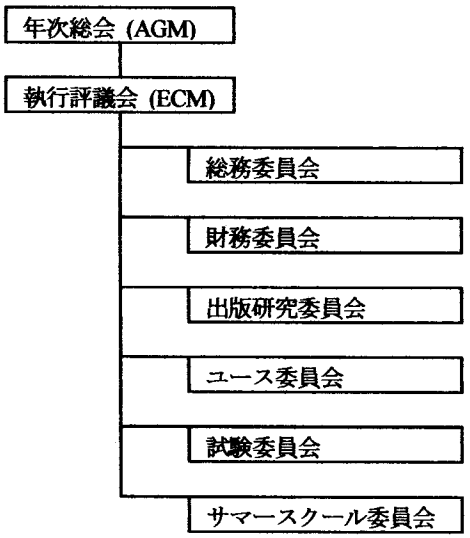
チェアマン　鳥山豊喜（トム鳥山）T/F 044-988-7773
e-mail: Tomtori@aol.com
セクレタリ　鈴木百代　T/F 049-296-1766
e-mail: momo-gon@mbj.niffty.com
トレジャラ　境　雅子　T/F 047-368-3873
e-mail: spey3@aol.com
委員会メンバー　池間悦子　T/F 045-982-8528
佐藤裕治　T/F 0424-86-3929
藤田淑子　T/F 044-954-7235
松田正子　T/F 0438-23-0475
若松陽子　T/F 042-593-2446

RSCDS本部の組織変更

きたる11月2日の本部年次総会 (AGM) はアバディーンで開催されますが、その主要議題は本部組織の大改編とそれにともなう新役員の選出です。

現在の組織はつぎのようになっています。AGM は最高の決議機関ですが、規約改正・RSCDS の基本方針決定・チェアマンを含む役員選出が主な役割で、より実際的な活動にかかわる討議は、年2回行なわれる執行評議会 (ECM) で行なわれてきました。総務委員会等の専門委員会が検討、決定した事項は ECM が承認することによって、はじめて正式決定となります(事後承認を含む)。

ECM でほとんどの委員会提案が承認されますが、ときには「委員会決定がおかしい」と差し戻されることがあります。

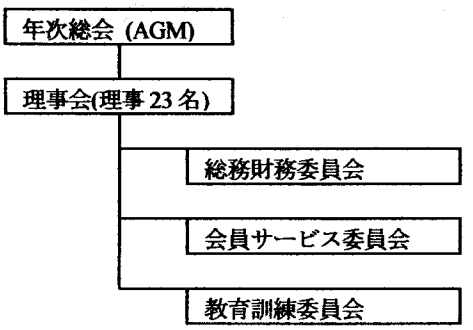


東京支部も ECM に代表を送っており、現在はエジンバラ在住のスチュワート・アダムさんにこの役を引き受けていただいています（前任者クレメント篤子さんの推薦)。世界の支部が代表を送るため、ECM は 160 人による大討議となり、時間ばかりかかって議事はいっこうに進まず、RSCDS としてスピーディな意思決定ができない、結果として本部財政赤字の一因になっている、という弊害が近年顕著になってきました。

本部提案の新組織

変化する社会情勢に適時適切に対応し、スピーディな意思決定をはかるため ECM を廃止し、権限をもった理事会 (Management Board) に変える、6つの専門委員会を3つに統合する、というのが新組織の概要です。また、3つの専門委員会に属する、出版、渉外、各スクール、試験、ユースなどの小委員会設立が予定されています。

会員・支部の意見は AGM ならびに会員サービス委員会を通して RSCDS に反映されることになります。



理事会は年4ないし5回開催され、3 つの委員会は必要に応じ開催されます。Book や CD の発行は会員サービス委員会、サマー／ウィンター・スクールや資格試験は教育訓練委員会の担当です。

新委員への立候補

RSCDS 会員ならばだれでも、チェアマン、次期チェアマン (Chairman-Elect)、理事、各委員長、各委員に立候補でき、またこれぞと思う人を推薦することができます。そのために立候補届け出用紙が会員数ぶん約 350 枚、本部からわが支部に送られてきました。しかしながら、

* 東京支部から立候補する人はいないと判断される。
* 東京支部から推薦したい人も見つからず、また推薦してほしいという依頼もない。同調者 10 人の署名が日本人のみの推薦では当選が危ぶまれる。
* 届け出には4種類の英文の身上書添付が必要。

ということで、いたずらな混乱をまねくよりは、と考えて会員各位への用紙送付は中止しました。英国内においては立候補者多数のようで、支持を求めて電話その他が飛び交っているようです。スチュワート・アダムさんはエジンバラから次期チェアマンに立候補しています。

年次総会への出席

会員 50 人につき 1 人、という本部規約にもとづき、東京支部は7人の代弁者（代議員）を AGM に送ることができます。みなさんのなかで AGM に出席したいという方がいらっしゃれば、至急セクレタリまでお知らせください。

出席希望者が7人に満たない場合、東京支部としての権利放棄ももったいない話なので、規約上許されている現地の英国人会員を東京支部代弁者として出席させたいと考えます。この人選はクレメント篤子さんにお願いするつもりです。

議題への賛否、人事投票については代弁者に一任しますが、ただ一点、海外支部のことを十分考えて投票してほしい、と依頼するつもりです。(Tom Toriyama)■

Book 42 Dances 講習会

東京北会場

残暑きびしい9月1日（日）、赤羽台東小学校に74名が参加しました。講師は松橋順子、田村妙子、トム鳥山（臨時）の3名。ピアノは市川洋子、嵯峨紀枝、村上美枝子さんがつとめました。午前中に4ダンスを講習し、4時少し前に全10ダンスの講習を終えました。

暑さと、血液が消化器系に集中したためでしょうか、午後の部で一時的に理解不足となる時間（平たく言えばボンヤリ）もありましたが、講師の1オクターブ高い声に励まされてわれをとりもどし、最後まできちんと踊ることができました。

東京北会場

東京南会場

東京南会場

こちらは9月21日（土）、川崎市の多摩区民館で行なわれ、50名の参加がありました。録音音楽による講習のため、北会場よりも長丁場になるのではと予想していましたが北会場よりも少人数だったためかそれほどでもなく、午後4時前に終了しました。

講師はトム鳥山、鈴木百代、境雅子の3名。*The Chequered Court, Hall Change, David Russell Hall* も比較的短時間のティーチングでフル・タイムスルーを踊り、これはある程度の経験者が来場されたためと思います。

両講習会とも若干でしたが東海、埼玉両支部会員の参加があり、うれしいことでした。会場取りでお骨入りいただいた赤羽SCDC、麻生SCDCのみなさんにお礼申しあげます。

これらの講習会に先立ち、8月18日（日）午後、赤羽台東小学校において予備試験合格者を含むティーチャーズ・クラスが開かれ、講師：トム鳥山、ピアニスト：市川洋子、村上美枝子さんにより10ダンスを講習しました。参加者24名でした。おりしも台風接近中、雨でした。はるばる金沢から参加された方もおられました。各ダンスの概要、ポイントはお分かりいただけたと思います。(Tom Toriyama)■

Book 42 自主講習会

各グループにおいて「Book 42 ダンスを踊りたいので講習してほしい」とのご希望があれば、セクレタリまでお寄せください。ティーチャー指名、非指名のいずれでもOKです。すでに“のしろウィンズ”からご要請があり、10月下旬に講習会を開くことになっています。

（支部としていくばくか費用負担すべきですが、財政不如意のためままならない事情をご容赦ください）

委員会だより

支部年次総会以降、1.5回／月の委員会を開いています。当初は支部財政のひっ迫にどう対処していくか、当面の行事をどうこなしていくかに議論が集中しました。この間、急に実施決定した行事もあり、年次総会のチェアマン所信とはうらはらな結果となって、関係する方にご不審を抱かせたことをお詫び申しあげます。

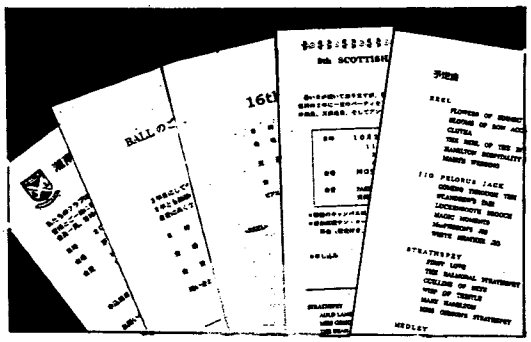
9月7日の委員会では、①1−3月までの支部クラス担当ティーチャー候補の選定②2003年Examsの進捗状況と今後の対応③New Year Danceの費用、プログラム決定とMCの人選④2月合宿の費用算定と外部講師招へいの諾否・人選⑤本部AGMにどう対応するか⑥寄付受領時の対処⑦講師派遣依頼受領時の対応⑧次号ブランチレターの発行時期、発送方法などを話し合いました。(Tom Toriyama)■

「JIG の部なになに」でよいか？

(Tom Toriyama)

あるグループ（英語圏では“サークル”と言わない）がダンス会、ボールを開く場合、大勢の参加を期待して他グループに案内のチラシを送る。

チラシには5W1Hの原則にしたがい、主催グループ名、日時、場所と案内図、会費額、ダンス・プログラムを記載している。



ダンス内容を述べていないチラシも見受けられるが、そういう催しには参加したくないと思う。「ダンス内容などどうでもよい、とにかく参加しろ」という、自分を一段上に置く姿勢が感じられるためである。くどい前文は簡素化、省略し、ダンス・プログラムを示すべきである。

そのダンス・プログラムであるが、近年「JIG の部なになに、REEL はこれこれ、STRATHSPEY はあれこれ…」というリズムごとにくくったやり方ばかりである。いつごろ、どこのグループがやり始めたか記憶にないが、受領するチラシのほとんどはこのようなダサい表記になっている。くくりプログラムを見るたびに、わたしはいつも苦々しい思いにとらわれる。

リズムごとにくくった表記がなぜダサいか？その理由は、それがダンス選定後の中間結果であって、完成品でないからである。心がこもっていないのである。古今東西を問わず、ひと様に差しあげるのは「心のこもったもの、完全なもの」なのだ。

世界広しといえど、こういうくくりプログラムの案内紙がまかり通っているのは日本だけである。フォークダンス・グループのチラシが「シングルの部、ミキサーの部、ダブルの部、セット・ダンスの部…」となっていたら、ダンサーは間違いなく「なんだこりゃ？」である。

ダンスを選定したのならそこで事足れりとせず、なぜもう一歩進めて、踊る順序どおりに並べた完成品にしないのか？30 分もあればできることではないのか？スコティッシュ・ダンス、フォークダンス両方をやっていながら、ダサい表記を不思議と思わないのだろうか？

「“Joie de Vivre” から始まって “The Duke of Perth” で終わる」という、順序にしたがった表記のチラシにぜひ改めていただきたい。（なお、欧米では“The Duke of Perth”、“The Montgomeries' Rant、“Mairi's Wedding”のような元気のいいダンスは、催しの終わりの部分にもってくるのが通例）。

「予定曲」、「変更があるかもしれません」の表記もいただけない。ダンスの進行が遅れ、プログラムから何曲かをスキップ（オミット）しないと閉場時刻を越えてしまう場合を想定しての文言である。ダンスの詰め込み過ぎ、時間管理のまずさ（多くは軽食、記念撮影などダンス以外で時間を浪費している）の逃げ口上にすぎない。

踊りたい曲をスキップされ、満足できないまま会場をあとにした経験が過去何回もある。カネ返せ、と言いたくなる。一生懸命練習してきたミュージシャンにも失礼である。主催者は（自分たち中心ではなく）参加者のレベルを想定してダンスと曲数を選定し、時間管理を厳しくして全ダンスを消化するよう心がけ、このような事前の逃げ口上記入をやめるべきである。「予定曲」に代わる文言はなにか？無記入あるいは「プログラム」である。

和製英語「フリータイム」は日本独特の風習である。英国のダンス会、ボールにおいてはリカップ（米、加ではブリーフィング）さえやらない場合が多い。日本流に言うなら、これは全ダンス「フリータイム」である。日本では参加者を増やすため、すべてのダンスにウォークスルーをやるのが普通で、ウォークスルーなしを示す言葉として「フリータイム」を使っているが、これは適当ではない。そのまま「ウォークスルーなし」でよいではないか。「フリータイム」付きのダンス会、わたしは珍妙ダンス会、田吾作ダンス会と思っているが。

「ノーコール」を使うグループもあるが、「コール」はアメリカン・スクェア、イングリッシュ・カントリー・ダンスの用語である。使うべきでない。ラウンド・ダンスのグループで親方に「いまのコール、踊りがつっかえた」などと言ったら、直ちに破門である。

正しい用語を使おうではないか。

英文表記は大文字・小文字の組み合わせが基本である。チラシのダンス名表記もこのようでありたい。道路標識ではあるまいし、大文字ばかりのダンス・リストを見せられると、万葉仮名ないしカナモジ主義者の文を見るようでたいへん落ち着かない。

また、ダンス名に定冠詞 “The” がある場合、これを記入するかしないか、考えを統一してほしい。省略するならすべてのダンス名表記から “The” を外し、記入するなら “The” のついたダンスはすべてこれを記入すべきである。ピリング・ブックをもとにダンス名を表記するのは見識を疑われますぞ、である■

Examinations 体験記

既報のとおり、St Andrews における試験(Examinations) で大井冨佐子・加藤沙弥子・長峯真弓・若松陽子さんが、Waterloo（カナダ・オンタリオ）の試験で増本サチ子さんが合格し、フル・ティーチャー資格を取得しました。おめでとうございます。大井富佐子さん、若松陽子さんから試験クラスの感想をいただきました。

St Andrews での Exams （大井冨佐子）

1．チューターのアラン Alan Macpherson は紳士的なトレーナーで、ダンシングについては全体的な流れや雰囲気を強調、ピアノ音楽に対してもステップに合った音符の配分に気を配り、楽譜の部分的な変更をミュージシャンに要求していたことが数回あり、ダンシング、ステップとトランジションにはかなり時間をかけた。

根本的なミス以外にアランの指摘はなく、自分で鏡を見て分析しろという方針だった。受験生自身が気づき、直そうとする『眼』と『意識』が必要で、忠告やヒントがあるのではと思っていたが、思い違いだったようだ。これを機に自分を客観的にながめ、手足をどのように使っているかを認識しながらステップとダンシングにのぞみたい。

2．課題ダンスを熟知し、マニュアルを熟読するのは言う間でもないが、Book と MMM (Vol. 1 & 2), RSCDS Leaflets のダンスをできるだけ読みこなし、ムーブメントが定かでないものを控えておく。問題意識を持っておくとクラスで取り上げられたり、他のダンスにそのムーブメントがあったりして、簡単に解決することがある。これはダンシング、ムーブメントの表現方法にもつながる。

アランのトレーニングでムーブメントや強調表現に耳新しい言葉がいくつかあり、参考になった。たとえば、bend の代わりに dip、reach forward の代わりに push などである。

3．ディスカッションでは非英語国受験生への配慮はなく、その討議速度に大変緊張した。すべては聞き取れないので勘を働かせ、ポイントをつかむようにした。アランもそのあたりはわかっていて、日本人の英語を辛抱して聞いてくれ、ありがたかった。

4．結果を見てつくづく感じたことは、日本のティーチャーが RSCDS の方針と、ダンシングそしてティーチングをなんと十分に理解し、正しく伝えていたかという感謝の気持ちである。よその国で他国の５名とともにトレーニング、試験を受けて改めて認識した。

内容の正確さ、的確な動き、そして熱意を持ったティーチングと、めざす目標ははるかに遠いが、すこしでもそれに近づくよう学んで行きたいと思う。

Certificate Class の体験 （若松陽子）

クラスメートは英２、米 1、独１、仏１、日４の計 9 名で、ピアニストに Heulwen Hall （エディター注：BBC の発音辞典によれば Heulwen はウェールズの人名で、日本語読みハイルウェン）、チューター見習いで Anne Smythe が加わっていた。

ダンシングから始まったが、われわれ日本組からあえて言わせてもらうと、他の人たちのステップ、ハンディングは「えぇっー！これがフル資格を目指す人？」と感じられるものだった。アランの指導でみながレベルアップできることを期待する。

課題ダンスのRSCDS録音テープに慣れていた私には、Heulwen のストラスペイ、パデバスクが遅めに感じられた。リズムに合わせるのに苦労した反面、ストラスペイのトランジションはやりやすかった。トレーニングの後半は鏡のある会場に移り、自分自身のステップをチェックしたが、これは早い時期にやってほしかった。

Heulwen はいつも力強いタッチ、大きな音で一生懸命弾いてくれた。アランがかの女に「みんなのダンシングはどうだった？」と聞くことが何度もあって、演奏だけでなく観察もやってほしいという、かれの暗示かと思ったりした。アランが別のリズムを要求すると、すぐに応えて弾き始める技量に感心させられた。4th, 5th place にいるとき、よい音楽を聞きながらこの地で踊れる喜びにひたることができた。アランも時折ハミングしていた。音楽を楽しみ、クラスの雰囲気を和らげようとしていたのかもしれない。

でも夢心地はほんの数分。ダンシングやフォーメーションの質疑応答に入る。課題ダンスに関するかれの解釈中、印象深かったのは *Golden Pheasant* の bars 24-25 のトランジション (6 hands round & back, and then set to & turn corners) 。かれの説明とデモに納得できなかった私たちに Anne Smythe も加わってディスカッションする。日本ではどうやっているの？とアランに問われる。結論は bars 24 で左足から skip change で中に入りコーナーを向くというやり方にまとまり、踊ってみる。

それよりも、つぎのことが大切とかれは言う。なるほどと思う。それは *Miss Hadden's Reel* の bars 29-32 (3rd couple followed by 1st & 2nd couples, cast off 2 places) は全員キャストの形で位置につく (2nd couple も straight in ではなく cast する)。そしてメドレーの *Glasgow Country Dance* ではリズムが変わるときに一瞬“間”があり、そのときに脚をクローズ、あらためてステップを踏む。

ダンスの記述どおりに踊ろうとするよりも、細かいフ

レージングにこだわらず、全体の流れ、よいバランスを重視するというのがアランの姿勢だった。

トレーニング中、アランが生徒個々に対応したカリキュラムで進めているのかが気になって、質問してみた。こちらがレベルアップのための公平なトレーニングを望んでいることをかれも理解してくれ、それなりの対応をしてくれた。

アランはいつも「Well done!」。神経過敏気味の生徒たちの気持ちを和らげてくれたが、かれ自身混乱しているような場面もあり、もっと確固としたもの、情熱的な面を表してほしいと思った。しかし、小さな声、静かなかれがコーチングでは一変する。大きく張りのある声、姿勢もびしっとし、ポイントをおさえ、むだのないリズミカルな言葉で動いてみせる。言葉と動きが簡潔で鮮明。長々とした生徒のフォーメーション・ティーチングとは対照的である。

私は言葉につまるとカウンティングしてしまうが、かれに限らずスクールでのティーチャーのコーチングを見習って行きたいと思う。試験後のイグザミナーとの面接で、カウントでウォークさせるより、ピアノで動かした方がよいとアドバイスされた。

音楽をいかに、そしてできるだけ多く使うかがティーチングでは大きな要素になる。ティーチング・プラン作りではダンスの分析、構成方法など、日本で学ぶ機会を与えてもらったことがとても役に立った。

RSCDSはダンスと音楽の密接なつながりを、予想以上に重視している。スコティッシュ・カントリー・ダンシングは踊りの面白さ楽しさだけでなく、音楽との相乗作用があってこのようにインターナショナルなものに広がったといえる。

宿題で正しい音楽の使い方という問題が出た。マニュアルの範囲内の解答を出したが、音楽を主題にした討議はなかった。筆記試験でステップ指導時の音楽の使い方という設問があり一応解答したが、イグザミナーとの面接でもっと掘り下げた答えを期待されていたのだ、と感じた。どの程度音楽の重要性を認識しているかの設問で、勉強不足を痛感した。合宿などで音楽の勉強会を設けて、いろいろな方の知識や意見を聞かせていただければありがたい。

トレーニングの合間にソシャル・ダンシングに参加し、息抜きとリフレッシュができた。ヤンガーホールではアランが生徒たちを誘ってくれ、かれのソシャル精神とマナー、心配りがうれしかった。

東京支部という豊かな土壌で育てられ、無事合格できたことに心から感謝しています■

オーストラリア・ウィンタースクール 2002

(Tom Toriyama)

2002年のオーストラリア・ウィンタースクールはシドニー支部がホストとなって、7月6日（土）－12日(金)の7日間開かれた。

わたしは2000/01のニュージーランド・サマースクールでシドニーのモーラグ・ネピアに参加を約束しまったため、行かざるを得なかった。2002年はシドニー支部50周年にあたり、モーラグから絶対来いとの要求があってOKさせられたのである。

場所はシドニーの西、1時間に1本の電車で都心から90分のリッチモンドというところ。東京の感覚からいえば高尾に相当する。会場・宿泊は西シドニー大学University of Western Sydneyのホークスベリ・キャンパスである。ここは農学部のキャンパス、しかも広いオーストラリアのこと、門から校舎にたどり着くまで左右に演習農場がひろがり、30分歩く。われわれのクラスはリッチモンド市内の小学校で、クラスメートの車に同乗できないときはこの道を延々歩いた。

真冬である。日中は15度くらいに上がって、こちらの男性はショートパンツで歩き回るが、朝晩は0度。冬支度を持っていったけれども、意外に役に立ったのは軍手とウィンドブレーカー（ヤッケとも言う）だった。朝の歩行にはじつに重宝した。この年だけの特異現象かもしれないが、7日間無風であった。一昨日道に落としたたばこの灰(吸殻ではない)がそのままの形で残っている。

真冬でうれしいのが一つある。オフ・シーズンで航空券が安いことである。東京—シドニーのカンタスの正規割引運賃、往復で¥76,000。札幌往復と同じくらいである。

スクールの内容はRSCDSサマースクールとほぼ同じ。午前中2レッスンのレベル別必修クラス、午後は任意参加のメンズ・ハイランド、レディス・ステップ、ティーチャーズ・クラス、音楽コース、講話、ゼネラル・クラスなどがあり（1日だけ植物園見学か淡水プール水泳あり）、夕刻はソシャル・ダンシング、ケイリ、音楽会、ゲーム大会というスケジュールだった。わたしはDPA (Dancing Proficiency Assessment) 準備コースに入ったため、ソサエティの課題ダンスばかりを踊っていたが、他のクラスでは非RSCDSダンスも踊られていたようだ。ただし、ソシャル・ダンシングでは地元シドニー支部製の3ダンスを除き、残り44ダンスはソサエティのダンスだった。

月曜夕はセルティック・マスカレードと称する仮面舞踏会だった。わたしは素面だったが、みんなは思い思いのマスクをつけている。最優秀の仮装にはご褒美もある。素面のほうが恥ずかしいくらいであった。つぎの機会に

はわたしも黄金バット、月光仮面あたりを考えなければ（いささかクラシックか）。

参加者の顔ぶれは言うまでもなく地元ニューサウス・ウェールズ州を中心にしてビクトリア州、クィーンズランド州、南オーストラリア州、タスマニア州などの豪州勢が7割を占め、ニュージーランドの連中が2割5分、残りが英国、米国、カナダという割合で、日本人は岡田周子（かねこ）さんご夫妻とわたしの3人だった。もうひとかた日本人がいらしたが、シドニー近郊から通いで参加しているマリコさんという、オーストラリア国籍の人だった。かの女は上手。有象無象にくらべたら抜きん出ている。

顔見知りの生徒はほとんどいない。NZ サマースクールでアドバンスド・クラスを指導していたアデレードのジーン・ドッズ、英国から豪州滞在中のバーバラ・コーディコット姉妹くらいである。ジョン・ドルーリに似た人がいると思ったら、NZ ウェリントンのイアン・ボイドと教えられた。イアンも生徒の一人。

生活は、というと RSCDS サマースクールよりやや落ちる。とくに食事は覚悟が必要である。長粒米の飯の上にチキンソースをかけたものが出てきて、これはなんだと問うと「カレーライス」。辛くもなんともなく、ターメリックも入っていないじゃないか。コーヒーにミルクを入れたら、ナフタリン入りの濃いウーロン茶みたいな味になってしまい、次回からはブラックで飲むことにした。

金曜はセット・ディナーだったが、ジャージーでのこのこ行った。ガラス壁から中を窺ったら、みなドレスにジャケットではないか。部屋にとって返し、プリンス・チャーリーに着替えてテーブルについた。たった1回のセット・ディナーだったが、つぎの皿が出てくるまで待つこと久しかった。部屋も共同洗面所もよろしくない。シャワーだけ、しかも外気とツーツーなので、陽のあるうちに熱いのを浴びないと日本人は肺炎になってしまう。

実行委員長はモーラグ・ネピア、生活面の元締めはマーガレット・クルックシャンクという人がやっていたが、この2人の心遣いがありがたかった。

ダンス指導は、95年3月に東京支部合宿で指導したことのあるメル&エリー・ブリスコー（米）、シーナ・カズウェル（マリコさんの先生で、破顔一笑タイプ）、ディーン・コープ（NZ）、デビッド・ホール（ロンドン）、アン・ケネディ（シドニー）、マーティン・マリガン（加）が行なった。いいね、と思ったのはマーティン・マリガン。任意に参加した“イングリッシュ・カントリー・ダンス”でかれの指導をうけたが、小柄なわりにシャープで大きな声、てきぱきとした動作、鋭い観察、クラスをだらけさせない選曲でたいへん面白かった。ノバ・スコシア、セント・ジョンズの人。わが支部に呼びたい1人と思う。

音楽陣も多才で、フィドルのクリス・ダンカン（スクール音楽監督）、ミュリアル・ジョンストン（解説の要なし）、デビッド・サウス（Acco.）など7人。ピアニストの一人、ジェニファー・フーンはアジア系（おそらく韓国）の豪州人、RSCDS のフル資格も持っていて、どこか小海弘子さんに似ている。メンデルスゾーン、ショパンが得意で、音楽会でも万人受けする「軍隊ポロネーズ」を弾いたが、本業は医者である。

バスケットボール場がソシャル・ダンシングの会場であったため音響効果はよくなく、でかい音だけが聞こえ、ミュージシャンの技量がダンサーに伝わらなかったのは残念である。しかしこれは欲であろう。

全クラスとも6日間のコースだが、6日間同じ指導者とピアニストでは指導するほうも受けるほうも息が詰まるというわけで、後半の3日間は別のティーチャー、ミュージシャンに代わるというやり方だった。指導者、生徒両方がフレッシュな気持ちになるため、これはこれでうまいやり方だと思う。

わたしの参加した DPA 準備コースは総勢18人。昨年、オーストラリアでのダンシング熟練度試験の成績は（わたしの結果と同様に）よくなかったようで、グレードを上げる目的でこのコースが設けられた。前半はアン・ケネディ／ジェニファー・フーンが課題ダンス習熟をコーチし、後半はデビッド・ホール／ミュリアル・ジョンストンがこんどは課題フォーメーションをコーチした。基礎ステップは6日間をとおして毎朝練習した。

基礎ステップに難がある男性（skip change がブリキ男のようにぎくしゃくする）、Men's chain がはじめての女性（女性との right hands turning なしにダンスはできない）もいて、ダンス経験豊かな生徒ばかりではなかったが、みんな楽しく6日間を過ごした。

2003年のウィンタースクールは7月中旬、南オーストラリア州のアデレード支部がホストで開かれる。ここにはジーン・ドッズというすばらしいステップのティーチャーがいる。みなさんも参加をご検討されてはとお勧めする。帰ってきてから、オーストラリアと日本の気温差にうんざりするけれども■

イングリッシュ・カントリー・ダンサーから みたスコティッシュ・カントリー・ダンシング

(コリン・ヒューム)

(原エディター注：以下は English Fork Dance and Song Society (EFDSS) の機関紙、"English Dance & Song" 1993 年冬号からの転載である。イングリッシュ・ダンサー、コーラーがわれわれをどうみているか、ロンドン支部会員にとっても興味深いのではないかと思う)

スコティッシュ・カントリー・ダンス (SCD) もイングリッシュ・カントリー・ダンスもそのルーツは同じである。フィギュアのほとんどは同一であるが、踊り方は一見まったくつながりがないと思えるほど違っている。両方のダンスをやっている人たちもいるし、過去 2,3 年セシル・シャープ・ハウス〔ロンドンの EFDSS の本部〕でイングリッシュ&スコティッシュ・ダンス会が開催されている。次回開催も確定している。

1920 年代にミス・ジーン・ミリガンによって SCD における標準化が行なわれた。当時の EFDSS にもそのような人がいたけれども、ミス・ミリガンは傑出した女性の一人だった。かの女の思想は郷土団体の連合会方式をとらない〔強力な中央集権組織にする〕こと、そして SCD をバレエに近づけることにあった。RSCDS (The Royal Scottish Country Dance Society) はいまや全世界に指導者を持っており、同じやり方で同じダンスを指導している。標準化によってもともとのステップはどこにもなく、中産階級の中年の婦人に歓迎されるよう衛生的になってしまった、と評論家は主張するだろう。もちろん、評論家は EFDSS に対しても同じことを言っているが、反論は別の機会にする。

わたしは、スコティッシュ・ダンサーはわれわれよりも上手なダンサーであると確信を持って言う。本物のグループ（デモ・チームではない）のストラスペイを見れば、美しさがわかる。そこには技巧があり、スタイルがあり、品位がある。コントロールされた動きがあり、かれらは音楽と一体になってダンスしているのである。他のダンサーを注視し、楽しませながら踊っている。

リール、ジグではどうであろうか？　躍動があり、面白さがあり、ここでも音楽と一体で、他のダンサーへのまなざしがある。そしてコーラーなしにこういったことが行なわれるのである。かれらのほうがうまいというのを認めざるを得ない。

わたしはコーラーなしで踊ることが、イングリッシュとスコティッシュ・ダンスの違いを形作っているのではないかと思う。みなさんが SCD を踊ろうとしてクラスに参加したとき、ティーチャーは毎回ステップ練習からクラスを始める。（もしイングリッシュ・ダンスでこれをやったとしたら、大騒ぎとなるのが目に見えるようである）。

ダンス指導に入ると、ティーチャーは 1st couple の動きをウォークスルーし、1st couple を 1 回躍らせたあとボトムに下げ、つづいて残りの二組にも同じように指導する。そのあと音楽で 8 回踊るが、このときティーチャーのコールはない。スコティッシュのクラスでは学ぶことが望まれているからである。

みなさんは習得を重ね、ついに土曜夜のダンス会に出かけることになった。そのときみなさんは前もってプログラムを読み、ダンスごとにどう動くのかを勉強しておかなければならない。ウォークスルーはありそうもないし、ダンス中 MC が動きをコールすることはそれ以上にありえない。

F.L.ピリングが編集した小さな緑色の本がある。この本には約 500 の有名なダンスが、濃縮されたダイヤグラムの形で記されている。ダンス会でこの本をスポランに入れていないスコッツマンは、シドマス・フェスティバル〔デボン県シドマスで開かれる EFDSS のフェスティバル〕でベルトに大きなジョッキをぶら下げていないフォークシンガーと同じと言えよう。

わたしはスコティッシュ・ダンス習得がきついと感じるようになり、クラスを欠席しがちとなった。しかし自分が踊らなくても、大勢のダンサーが動き回っているのを見るのは面白い。ほとんどのスコティッシュ・ダンスは 4 カップルのロングワイズ・セットであり、そのうちの 3 カップルが毎回踊る。そのダンスで 4th couple になるよう立ち回ることができたとしよう。そうすると、1 回だけだがそのダンスを注視する機会が得られる。だが SCD では長いセットを作って、順番を数えるのである。4th couple でいようとするのは容易ではない。

イングリッシュ・ソシャル・ダンスではたいがいコーラーがいる。これは長所でもあり、同時に短所でもある。長所というのは豊富なバラエティである。4 人のコーラーがいれば、プログラム曲の重複はほとんどない。しかしみなさんは決してダンスを勉強しようと思わない。これが短所である。

コーラーによって踊るのであり、音楽で踊っていないのである。初めから終わりまでコールし続けのコーラーもいる。これはダンサーにとってよいことばかりだ、とは思わない。コーラーのいない場面も設けられるべきと思う。たとえみなさんがミスしたとしても、である。

反対に、スコティッシュのティーチャーはコーラーとしては失格である。資格をとるための習熟課題になっていないからである。わたしがかなり複雑なダンス、*Ian*

Powrie's Farewell to Auchterarder をコールし、イングリッシュ・ダンサーがそのとおりに動いたとき、かれらは目を丸くした。

二番目の大きな違いは、スコティッシュ・ダンサーがいつも**"踊っている"**ということである。速いダンスの場合、かれらは skip change of step （イングリッシュよりもきちんとしており、粋である）、slip step と pas de basque で踊る。ゆるやかに踊るときは strathspey step である。（これはかなり様式化された美しいステップだが、百年前からあったかどうか、疑わしいところがある）。

あるイングリッシュ＆スコティッシュ・ダンス会で、つぎのような経験をしたことがある。踊りは *Unrequited Love* で、一人の経験豊かなスコティッシュのティーチャーが困惑していた。わたしに、ステップをそこでやってみせてほしいと言うのである。なんと、どのように**"歩く"**のかわからないのである。

しかしそれと同じように、イングリッシュ・ダンサーは**"踊る"**ことを知らない。われわれは reel や figure of eight で skip change of step を不承不承に少し使う。8 小節以上の skip change など聞いたこともない。だからスコティッシュ・ダンサーはわれわれのダンスをこう言う。
「これはケイリ・ダンス？！」

かれらは一晩中踊る。ほとんどのダンスは 32 小節を 2 回踊る、ウォークスルーをやる時間はとられていない。
「イングリッシュは疲れるよ」とかれらは言う。
「ウォークばかりだし、身体にアドレナリンがわいてこないんだ」

みなさんがスコティッシュのダンス会に行くと勇気づけられると思う。のめり込むエネルギーがまだあったんだ、とわかるからである。

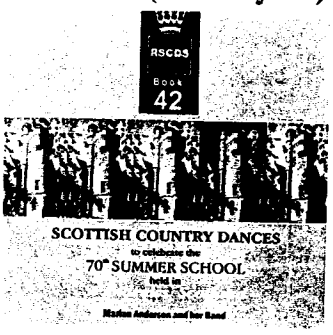
スコティッシュのダンス・シューズは柔らかく、しなやかである。バレエとのつながりを強調しているためである。かれらはみなさんに、もっとトウで高く立ってと励ますだろう。したがって、地につながれるのではなく、**"踊る"**ことになる。

スコティッシュを踊るとき、ふつうわたしが行くのはロンドン、ポント通りのセント・コロンバ教会のホール〔ロンドン支部のダンス会場〕である。広いホールで、冬になると毎月曜日の夜は無料になる。開始から 30 分はステップ授業である。そのあと頼るのは自分自身だけとなる。コールなし、ウォークスルーなし、ダンスとダンスの遊び時間なしである。

1 曲終えたらパートナーに礼を言い、イスに戻ってつぎのダンスの解説を見る。と、もうセットができ始めている。踊ってみようと決心し、パートナーを探し、ボトムにつく。こんな具合である。

誤解しないでほしいのだが、わたしは第一にイングリッシュ・ダンサーである。わたしたちには多種多様なスタイル、フォーメーションがある。わたしはイングリッシュ・ダンスのほうがソシャブルだと思う。けれども、わたしたちはスコティッシュ・ダンシングから多くのものを学ぶことができるであろう。(by Colin Hume, from "The Reel" No. 207, Feb-May 1994, published by the RSCDS London.) ■

新 CD 紹介 (Tom Toriyama)



(1) Music for Scottish Country Dances BOOK 42 (RSCDS CD029) by Marian Anderson and her Band
Book 42 の全ダンス。内容略。

(2) Reels and Wheels (FALCDS001) by Gordon Shand and his Band
Sarah's Favourite (8x32J), Welcome to Callum (4x32R), The Falkirk Bairn (4x32S), The Falkirk Millennium Wheel (96R), Old Spedling Castle's Ghost's Dance (8x32J), Charlie's Silver Jubilee (4x32S), The Wellington Connection (4x32R), Miss Francis Martin Medley (4 for 32S+32R), The Civil Engineer (4x32R), The Crieff Hydro (8x32J), A Tribute to Patsy Rennie (64S+64R), The Holywood Romance (4x32S, SQ), The Luckenbooth Brooch (8x32J), Irene McLean of Duns (4x32R), Mrs May Anderson's Strathspey (3x32S), The Jubilee Quadrille (2x88R), The Chas Reel (8x32R)

(3) Ceilidh Round the Steeple (FALCDS002) by Gordon Shand and his Band

Gay Gordons, Circassian Circle, St Bernard's Waltz, Britania Two-Step, Dashing White Sergeant, Pride of Erin Waltz, Virginia Reel, The Riverside, Canadian Barn Dance, The Lomond Waltz, The Flying Scotsman, The Bridge of Athlone, Robin's Easy Circle, The Swedish Masquerade, Friendship Waltz, Call of the Pipes, Southern Rose Waltz, Son of the Rock, The Eva Three Step, Orcadian Strip the Willow

(1)はマリアン・アンダーソン楽団が演奏する Book 42 ダンス録音。マリアンは長くミュリアル・ジョンストン楽団のリード・アコーディオン奏者として活躍してきたが、ミュリアルが米国ニューオーリンズに居を移したため、かの女自身のバンドを結成した。当世のスピードと比較すると、ストラスペイは早い演奏である。Anna Holden's Strathspey はミュリアル盤よりも 34 秒速い 8 分 19 秒。リール、ジグはふつうの速さである。わたしはマリアンの演奏が好きなので評価は甘くなってしまうが、それを差し引いても三つのリード楽器のアンサンブルはすばらしく、リスニングだけでも楽しい。リズム隊は好サポートを行なっているが、もう少し前面で活躍してほしいところである。

〔注文略号: Book 42 CD〕

(2)は RSCDS フォーカーク支部が 2001 年に出したもので、Luckenbooth Brooch 以外はなじみがないが、17 ダンス中 16 ダンスはインストラクションが付いているのですぐダンスできる。ジム・レイ、アラン・メア作のダンスもある。8x32 のストラスペイがないのは残念。この CD でゴードン・シャンドは大いに遊び心を発揮し、楽しい演奏を展開している。リズムもダンサーを盛り上げるバッキングである。録音はまことに鮮明。

〔注文略号: フォーカーク・カントリーCD〕

(3)は（2）と同じくフォーカーク支部が出したケイリ・ダンシングの音楽 20 曲。こちらもダンス・インストラクション付き。Yellow Rose of Texas などという曲も出てきて、こちらも遊び心十分である。なにもフォークダンスのレパートリをやることはないと、日本のスコティッシュ・グループではケイリ・ダンシングはめったにやらないが、ときには入れていいのではないか。また、ウォームアップ・ダンシングとしてもよいと思う。

〔注文略号: フォーカーク・ケイリ CD〕

このほかに RSCDS は旧録音の CD 化を進めていて、このほど Book 5（資金提供：バンクーバー支部）
Book 21（同安室喜美子さんとグラスゴー支部）
Book 29（同ニューヨーク支部）
Leaflet Dances Vol. I（同イングランド南東支部連合）
Leaflet Dances Vol. II, の CD が発売された。4x32 のストラスペイはやはり 4x32 で、8x32 にはなっていない。

これらの CD のご注文は、

郵便振替 00240－0－ 63517
東京ブランチ
（この口座は物品購入専用です）
締切り 10 月 22 日（火）

価格:	Book 42 CD	¥2, 700
	フォーカーク・カントリーCD	¥2, 800
	フォーカーク・ケイリ CD	¥2, 800
	Book 5 CD	¥2, 500
	Book 21 CD	¥2, 500
	Book 29 CD	¥2, 500
	Leaflet I CD	¥2, 500
	Leaflet II CD	¥2, 500

いずれも送料込み。現品先納・代金後納は、3カ月たってご送金という方がいるため、今回代金先払いとします。担当 藤田淑子■

グループ行事案内

赤羽スコティッシュ・カントリー・ダンス・クラブ
Autumn-End Ball
2002 年 11 月 24 日（日）11:00-4:00
北区赤羽会館大ホール
¥1,500

＊ ＊ ＊

東京スコットランド・ダンスを楽しむ会
Year-End Ball
2002 年 12 月 8 日（日）1:00-5:00
日本出版会館
（JR 飯田橋駅・神楽坂方面口）
¥5,000

＊ ＊ ＊

TS スコティッシュ・カントリー・ダンサーズ
Annual Dance
2003 年 1 月 13 日(月・休) 1:00-4:30
ピアノ 小海弘子
武蔵野市スイングホール
（JR 武蔵境駅北口）
¥1,000

次号は 1 月発行予定。2-5 月の行事お知らせ乞う